

ご近所のお医者さん

□
710
□

大阪大学医学部附属病院
消化器内科

林義人さん ー吹田市

萎縮性胃炎と胃がんリスク

ヘリコバクター・ピロリ菌（ピロリ菌）という細菌をご存じでしょうか。

この細菌は主に幼少期に感染し、胃粘膜に定着して慢性的な炎症を引き起こし、萎縮性胃炎の原因となります。萎縮性胃炎は、軽度から高度まで進行度がさまざま

で、進行度に応じて胃がんの発生

リスクが高くなります。しかし、萎縮性胃炎自体には自覚症状がほとんどないため、多くの人が知らないうちに進行してしまうことが問題となります。

萎縮の程度は内視鏡検査によってチェックすることができます。

ピロリ菌に感染している場合、適切な治療によって除菌することが可能です。通常、1週間程度の内服治療が行われ、高い確率で除菌に成功します。

自覚なく 検査で確認

ただし、薬剤耐性などの理由で1回の治療で除菌できない場合もあり、その際は2次治療が検討されます。除菌することで炎症の進行を抑え、胃がんのリスクを軽減できると考えられています。

現在、一部の自治体では、中学生や高校生を対象にピロリ菌感染の有無を調べる検査が実施されています。また、多くの会社健診や人間ドックでもピロリ菌感染の有無を調べる検査が含まれ

ています。これらの取り組みは、若いうちに感染を確認し、早期に除菌することで、将来的な胃がんのリスクを減らすことにつながります。

ピロリ菌の除菌後も、定期的な内視鏡検査の受診が推奨されます。内視鏡検査によって胃の状態を詳しく調べ、早期に異常を発見することができま

す。胃がんは早期に診断されれば、内視鏡的切除によって治療が可能であり、術後

も通常の生活を維持できます。そのため、自覚症状がなくても定期的に検査を受け、自身の健康状態を把握することが大切です。

自身のリスクを正しく認識し、定期的な経過観察を続けることが、将来的な健康維持につながります。胃の病気は進行するまで自覚しにくいいため、ピロリ菌の感染の有無や胃粘膜萎縮の程度を確認し、適切な対応を取ることが重要です。（府医師会広報委員会委員）

